

# 日本 戦闘の 者



荒谷 卓 (あらや たかし)  
生年月日：昭和34年秋田県出身  
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書：『戦う者たちへ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『サムライ精神を復活せよ』並木書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>

2002年11月、米陸軍特殊作戦コマンド・JFK Special Warfare Center & School (ジョン F.ケネディ特殊戦センター&スクール：JFKSWCS) への留学が決まり米国に渡った。最初の数ヶ月は、海外留学生に必要な英語能力の養成と試験を受けるため、米国テキサス州サンアントニオにあるラックランド空軍基地に向かい、DELICにおける英語教育(スペシャライズ課程)を受けることになる。本課程は通常9週間の履修を必要とするが、フォート・ブラッグにおける教育の日程の都合で8週間の履修で試験を受け卒業した。

2003年1月26日、ノースカロライナ州はフォートブラッグに到着。空港にはJFKSWCS隷下の教育隊司令官が直接出迎えに来てくれた。JFKSWCSにおいて教育全般の責任を有する司令官と直接交渉し、Qコースと呼ばれるグリーンベレー隊員養成コースのみならず、潜入・狙撃・CQB等のアドバンス・コースや民事作戦・心理作戦等新たに特殊作戦部隊を創設するために必要な教育訓練と特殊戦隊員のリクルート及びフォートブラッグに駐屯する特殊作戦部隊との研修調整について理解をもらった。また、司令官の隣に専用のオフィスを開設し、上記研修の具体的調整についての便宜を図ってもらった。それらの内容については保全上の制約があるので紹介することはできないので、秘密保全上の規定に準じて可能な事のみ紹介するとどめる。

特殊戦部隊の活動分野は、きわめて広範囲に及ぶので、特殊作戦の概念を正確に理解する必要がある。一般的に特殊作戦と言えば、映画でよく見るようなレンジャーやコマンドー部隊が実施する襲撃や伏撃のような「ダイレクト・アクション」をイメージするかもしれないが、現代における特殊作戦の主流は「アンコンベンショナル・ワーフェア」、つまり「非常作戦」と言われるものである。非常作戦とは、例えば、市場化されていない国の政府の転覆や、市場から離脱しようとする勢力をつぶすための政府支援等のような作戦である。つまり、軍事の領域にとどまらず、経済、外交などを含む広範で高度に政治的な目的の作戦が非常作戦なのだ。今日、特殊部隊が投入されない軍事作戦はないと言っても言い過ぎではない。例えば、最後の大規模な通常作戦を伴う作戦はイラク侵攻作戦であったが、作戦目的は、フセインの政府を潰してイラクの油田などの資源を市場化するためであり、このような市場化のための政体転換は「非常作戦」に該当する。したがって、この作戦の指揮を執ったのは中央軍特殊作戦コマンドである。南部から攻撃した海兵師団・3師団と多国籍軍部隊は通常戦部隊である。これらの部隊は、ほぼ無抵抗のイラク軍に対し、攻撃を加えながら

バグダットまで北上しただけである。これに対して北部から攻撃したのが特殊部隊とその隷下に編入された陸軍101空挺師団等だ。北部から攻撃するにあたっては、事前作戦としてCIAなどの工作により、イラク軍人に対する心理戦で戦闘行動を抑制し、トルコ国境にいるクルド人に対しイラク新政府への参画や彼らの独立国「クルディスタン国」の建国などをほめかしフセイン政府と戦うように扇動し、グリーンベレーが対フセイン政府のためのクルド人軍隊を訓練して創設した。そして、「イラクの自由作戦」において特殊部隊は空路イラクに潜入し、スカッドミサイル基地をすべて潰していき。事後作戦としては、日本占領下に日本人を反日日本人に変えたように、イラク市民に対する心理作戦により反フセイン工作を展開するとともに、フセインの捜索・捕獲をした。これが、通常作戦と非常作戦の違いだ。

軍事作戦がこのような大きな変化を遂げた背景は、冷戦後、共産主義経済が崩壊し、唯一の軍事大国となった米国がリードする形で、市場の要求によるグローバル資本主義を世界秩序として全世界への拡大を図ったことによる。

したがって、作戦行動は、伝統的な「攻撃」や「防衛」ではなく、「人道支援」や「社会復興支援」という肩書をつかっているが、実際はマネーを唯一の価値とする市場原理を強制するための「安定化作戦」と「(グローバル化) 支援作戦」に変わった。このような作戦は、ただ敵を殺傷し地域を占領すればいいというような単純な作戦ではなく、政治体制の変化を目的とした、かなり複雑な軍事作戦を遂行する必要がある。このような作戦では、兵士一人一人の判断と行為が、直接国際政治に影響を及ぼす可能性があるため、軍事作戦の遂行と結果に対する政治の要求がきわめてデリケートになり、その結果、G.I.ジョーのような単純な戦闘行動だけを遂行する兵士は不必要となり、高度な判断と熟練された技能を身につけて非常作戦を遂行できるエリート兵士が必要とされている。

特殊戦部隊は、上記のような目的に沿った能力を有する部隊である。したがって、軍事以外にも、医療、通信、教育、建築等の民事や心理作戦に及ぶきわめて広い分野で多様な能力を保持している。

当時の自衛隊は、自衛官個々の潜在能力は充分高いと言うことはいえるのだが、現代戦を遂行するために必要な、法制、教育訓練、装備品、そして何よりも新しい作戦形態の理解や戦うモチベーションにおいて課題は多かった。法制や政治・行政上の問題は自衛官の立場ではいかんともしいが、最も身近であるはずの市街地の戦闘ですら、



テキサス州はラックランド空軍基地にて。ここは基本的な空軍入隊のための唯一の航空教育・訓練機関でもある。

基礎も不十分というのが実感であった。一例を言えば、敵味方が混合し状況によっては民間人も混在するような状況下で、見方兵士や非戦闘員の安全を確保しながら戦闘する要領、建物内で所在の分からない敵へのアプローチの仕方、玉が貫通するような建屋内で使用する武器・弾薬・爆破薬・射撃に関する知識と技能、電波が届かない屋内での情報活動や隊員間の意思伝達要領、複雑な建物での補給・整備や救命処置等基礎の基礎から訓練する必要があった。

当時は、一般隊員のみならず高級幹部でさえ、レンジャーと特殊戦部隊の区別がつかない状況だったので、それを口頭で説明するのは極めて困難であり、結局、私自身が特殊戦の遂行能力を身につけて日本に持ち帰るほかなかった。

とはいっても、グリーンベレー兵士は、全米国民のあこがれであり、軍隊のみならず一般社会からも優秀な人材を直接リクルートして選考に選考を重ねて選び、数年の歳月をかけて教育訓練して養成するエリート兵士である。グリーンベレー兵士としての資格を得るためのQコースは4つのフェーズから構成されるが、最初のフェーズIだけで60%が脱落する。その後も教育の進展とともに脱落者や不合格者が続出し、最終的には20%~30%程度の者だけが生き残り、グリーンベレーを被ることができるようになる。

私の同期生たちは、米国人と少数の外国特殊戦兵士たちだ。多くの兵士は20歳代、30歳代は数名、私以外に40歳代は誰もいない。おまけに、大体が大尉であり、少佐が数人、大佐は私だけである。予想どおり、「おいおい、このおっさんなんか間違ってきているようだよ」「このおっさんが何日もつか賭けをしようぜ」という展開になった。俺が1週間以上Qコースに残るということに賭けた奴はいなかった。

俺は言った。「俺も賭けていいかい。1週間だ」。その後、武装障害走(完全武装で障害物を走破すること)、着泳(コンバットブーツ、戦闘服、ヘルメットなど完全

着泳で遠泳すること)などを経て1週間。外国特殊戦留学生を含む米国学生たちが脱落して行く中で、俺は、体力検査、泳力検査、スター(ランドナビゲーション試験)を満点で合格した。賭けはいただきだ。生活費が乏しかった俺には助かった。それだけで



フォートブラッグでの降下訓練の様子。

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表：荒谷 卓



米陸軍特殊作戦コマンドの司令部があるフォートブラッグのアーサー D. "ブル" サイモンズ大佐の像。ベトナム戦で特殊部隊の英雄だ。

は、同期の学生や訓練インストラクター達からレスペクトを受けた。「うちの国には、大佐でお前のように兵士と一緒に訓練できる奴は見たことがない」。当たり前だ。俺は日本の戦闘者だ。自衛隊を背負っているだけじゃない。俺が背負っているのは、日本の文化と歴史と伝統を受け継ぐ日本の戦闘者としての全てだ。俺が生きている限り日本は日本で在り続ける。日本を守っているのは俺だ。絶対に負けない。日本の歴史に名を連ねる日本の戦闘者達がそうだったように、体が朽ち果てても、精神は無敵のまま永遠に生き続ける。何度でも生まれ変わって日本の戦闘者として戦い続ける。そういう生き物なんだよ。日本の戦闘者とは。